

## 「シュン君とカズ君」

鹿屋市立南小学校 校長 猪野 祐介

ノックの音でおおよそ相手が誰かは分かるものである。先週の水曜日の午後、うっかりすると気付かぬほどの小さな「コンコン」が聞こえた。

(これは、子供だな。)

そう思った私は、「どうぞ、どなたですか。」とできるだけ優しい声で返事をした。

校長室のドアを開けると1年生のシュン君(仮名)が立っていた。彼の斜め後ろには同じく1年生のカズ君(仮名)が立ち、2人そろって私を見上げている。シュン君が言うにはこうであった。

「校長先生、あのね。カズ君はお迎えが来るまで一人だからさびしいのでどうしたらいいですか。」

本校は、地域の方が放課後の見守りに毎日来てくださる。お迎えを待つ児童は、地域の方と図書室で待つことになっているのだ。その日は、地域の方が来られるまで少し時間があり、2年生はまだ授業中。おまけにシュン君のおばあちゃんは既に玄関までお迎えに来ていた。「なるほど」と合点がいった私は、「そういうわけか。いいですよ。私が図書室で一緒に待ってあげましょう。」

ほっとした瞬間、カズ君の瞳が潤んできた。しかし、口元がそれをぐっところえ、「泣くものか。」という力強さを表出させている。「やったあ。助かったあ。校長先生ありがとう。どうなるかと思ったよ。よかったあ。」シュン君は、大きな独り言を言いながら、おばあちゃんの方へ歩いて行った。振り返りもせず、でも本当に嬉しそうに。シュン君の嬉しそう大声を聞き、カズ君にもいつもの笑顔が戻った。

本校の1年生は、シュン君とカズ君の2人だけである。

人間関係は、相互関係である。特定の2人の間に何か不穏な関係が生まれた場合、原因は双方にある。「ぼくは何もしてないのに、〇〇君が一方的に・・・。」なんてことはほとんどない。たいがい「ぼく」の方も何かをしているものだ。同様に、温かな関係性は、双方によって作り上げられる。カズ君とシュン君は同時に安心を手に入れていた。水曜午後のこの一場面は、担任による「発達支持的生徒指導」が普段から行われている証であると考えている。

学校は子供たちにとっての社会である。そこには、組織があり人間関係がある。そこには権利と義務が同時に存在し、個人の中には責任感と人間的な弱さが渦巻いている。子供は、大人が思っている以上に強く「正しく生きたい」と願っている。しかし、子供であるが故に、不安や怠惰な気持ちなどの人間的な「心の弱さ」も多分に持ち合わせている。つまり、常に思い悩む存在なのだ。だからこそ愛おしい。

昨日と違う今日を発見したときの子供が見せる「驚き」や「喜び」、または「落胆」や「嘆き」は、子供たちが懸命に生きている証である。私たち教師はそれを畏敬の念で見守らなければならない。子供の自発的な発達を側で支える生徒指導の理想像は、そのような姿であると私は捉えている。